資料1

宮澤賢治「春と修羅」の詩に出て来る「ZYPRESSEN」（糸杉）は、まずこんな歌として詠われました。

宮澤賢治は、大正三年一月号の『エゴ』（第二巻一号）を飾り、その後、『白樺』や『現代の洋画』などいろんなところで紹介されたゴッホのペン画の「星月夜」（資料3）を見ているはずで、それに感動して短歌を二首作ったのです。この歌を、全集の校訂者は大正八年作と推定しています。二種類の草稿が残っていて、一つは自筆。もう一つは、その年の夏妹のトシが清書した原稿です。（まず自筆、次に、トシの清書稿を並べて掲げます）。

サイプレス
忿（いか）りは燃へて
天雲（あまぐも）のうづ巻をさへ灼（や）かんとすなり。

サイプレスいかりはもえてあまぐものうづまきをさへやかんとすなり

天雲の
わめきの中に湧きいでて
いらだち燃ゆる
サイプレスかも。

雲の渦のわめきのなかに湧きいでゝいらだちもゆるサイプレスかも

資料2

その賢治の歌の対象となった絵はどんな「サイプレス」の作品だったのか。最初に書きましたように、詩人たちの同人誌『エゴ』第二巻一号の表紙を飾った、現在では「星月夜」の名で知られている作品ですが、それをご紹介しようと古い資料の山を掘り返していたら、こんな新聞記事が見つかりました。これはまた、別の話題も用意しており、そしてみなさんも興味を持っていただけそうな記事ですので、これをコピーしました。資料3がそれです。

現在のわれわれが親しい「星月夜」はニューヨーク近代美術館が所蔵している油彩画の「星月夜」ですが、大正時代日本人が初めて接したゴッホの「星月夜」はペン画でした。もともとはドイツのブレーメンの美術館にあったのですね。

下のコピーは、資料3の新聞記事の下半分です。この記事はA4をはみ出していますので、出来ればみなさんに原寸大コピーを提供したいと、ちょっと無理な構成ですが、まず、資料3を読んでいただき、矢印にしたがって、下のコピーへ目を移してください。

ついでに、ナチスの支配下にあったフランス政府が、ユダヤ人から略奪した絵を、今頃返還されたニュースが、このゴッホ「星月夜」の記事にくっついていたので、切り捨てるのも可哀想なので、付けておきます。

↓

ド・サルキシャン現館長は、「モスクワの銀行に保管されていること以外、知らされていない」という。

「個人の密輸品」

ロシアとドイツは冷戦後、文化財の返還について交渉を続けてきた。一部は返還された。だが昨年11月、東京で開かれた会議「文化財をめぐる戦後処理について」に参加したブレーメン大学のウォルフガング・アイヒベーデ教授は「90年代、ロシア側は（経済的な）補償さえあれば返還すると柔軟だった。しかし、ドイツ側が国際法を盾に（無償での）返却を迫ったため好機が失われた」と指摘した。

実際、ロシア議会は態度を硬化させ、96年、第2次大戦で没収した文化財の権利はロシアにあるとする法律を成立させ、返還はさらに困難になっている。

サルキシャン館長は、こうした対応に懐疑的だ。「戦時中に国家が公的に持ち帰った物は戦利品だ。だが、個人が持ち帰った物はいわば『密輸品』であり、返すべきなのに」

日本人の心に焼き付いたゴッホの「星月夜」。人々が再び目にできるまでには、まだ時間がかかりそうだ。

⇓

された。第2次大戦中、ナチス・ドイツに協力したフランスのビシー政権に略奪され、5月に持ち主の相続人に返還された1枚だった。

この作品は第2次大戦までは富豪のジャフェ家が所有。43年にビシー政権がフランスで略奪後、「ユダヤ人資産」として、同家の60点以上の絵画と一緒に売却。戦後はフランス政府に返還されていたが、5月に同家の相続人に返還した。ナチスによる、主にユダヤ人を対象にした美術品の略奪や強制的な売却同様、ビシー政権でも「略奪」があったことを示す1枚だ。

資料3

ゴッホ名画 翻弄され60年

「星月夜」 返還メド立たず

戦利品としてドイツからロシアへ

渦巻く星空に炎のような糸杉――。日本人の大好きな「炎の画家」というイメージの元となったとされる、1枚のゴッホ（1853～90）の絵の行方が注目されている。第2次大戦の戦利品としてドイツからロシアへ運ばれ、長らく秘蔵。03年に一度展示されたが、その後はロシア政府が極秘に保管している。「ゴッホ神話」を形作った絵は、60年を経てなお、戦争の「捕虜」として時代に翻弄（ほんろう）され続けている。（山盛英司）

糸杉のある田園風景が描かれた素描「星月夜」（1889年）。ニューヨーク近代美術館が所蔵する同名の油絵が有名だが、日本では素描の方が早く知られていた。

ゴッホが日本に最初に紹介されたのは1910年とされる。同年、高村光太郎や森鷗外らが記述。4年後、詩人の千家元麿が雑誌『エゴ』の表紙絵に素描「星月夜」を使った。その後、絵は多くの芸術家に影響を与えた。宮沢賢治もこの絵を歌に詠んでいる。

美術評論家の木下長宏さんは「日本でゴッホを『炎の画家』や『炎の人』と呼ぶのは、この素描から生まれたイメージが逆照射されて出来上がった人間像だ」とみる。

素描は、第2次大戦までドイツのブレーメン美術館が所蔵していたが、戦災で破壊されたと思われてきた。ところが冷戦終結後、ロシアに秘蔵されてきたことが判明した。その経緯はかなり複雑だ。

45年、ドイツに進駐したソ連軍の兵士で建築家のビクトル・バルジンは、避難先になっていたドイツ貴族の城で素描362点と油絵2点を発見。ロシアに持ち帰った。「星月夜」もあった。

当時、ドイツから戦利品として組織的、個人的にロシアに運ばれた美術品や文化財は数百万点に上るとされる。戦利品には、ナチス・ドイツがロシアで行った破壊や略奪への報復の意味もあった。その多くは、90年代までロシア国内ですら秘密にされた。

冷戦後まで秘蔵

バルジンも「国家のために持ち帰った」として、コレクションをモスクワの国立建築博物館に寄贈した。だがその後、同館の館長になると考えを変え、70年代からは「ドイツに返すべきだ」と政府に手紙を何通も書いた。冷戦が終結した89年には、ブレーメン美術館に事実を伝えた。

返還への機運が国内外で高まるなか、ロシア文化省は92年、突然「保管」を理由にコレクションを強制的にエルミタージュ美術館に移し、展覧会を開催。評価額は全体で240億円以上といわれた。バルジンは97年、望みがかなわぬまま76歳で亡くなった。

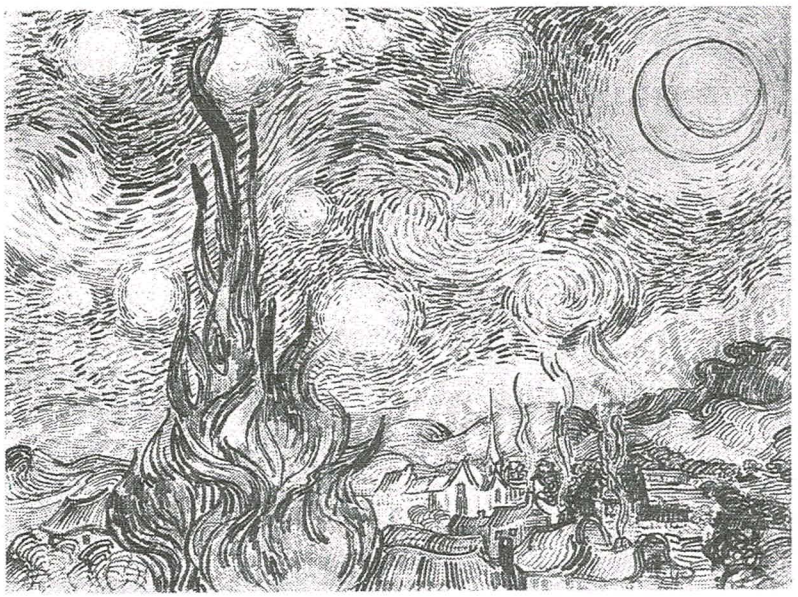
03年、ブレーメンでバルジンのコレクションの展覧会が計画された。ドイツ側には、そのまま取り返そうという思惑があったという。それを知った、一部のロシア国民や議会が反発。同年、会場を建築博物館に変えて開催した。

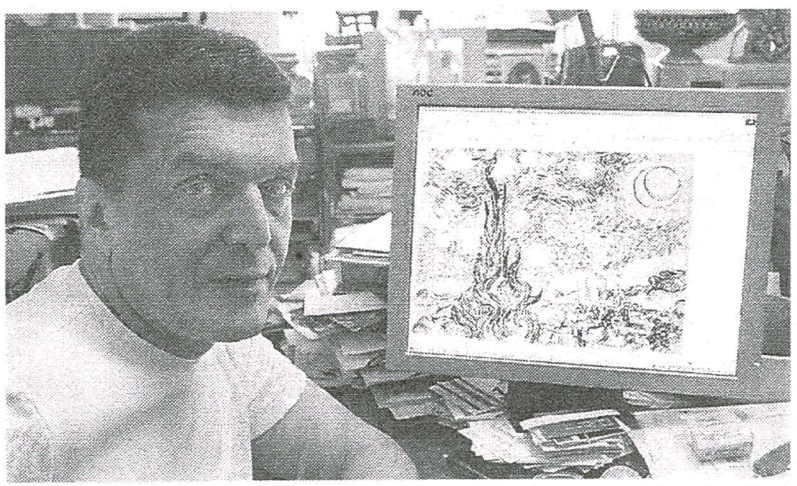
展示後、作品は国が管理している。建築博物館のダビッ

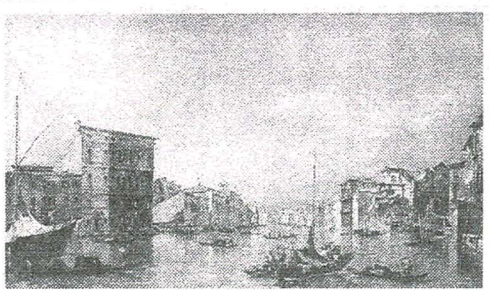
仏の略奪絵画 返却され落札

8億5千万円

18世紀のベネチアの画家フランチェスコ・グアルディが大運河を描いた油絵が8日、ロンドンで開かれた競売会社クリスティーズのオークションで約438万ポンド（約8億5千万円、手数料含む）で落札







㊤戦後、燃えたと思われてきたゴッホ「星月夜」（1889年）㊥「ロシアの美術館には多くの戦利品が隠されてきた」と語るサルキシャン国立建築博物館長㊦仏政府からユダヤ人遺族に返還された油絵